芥川龍之介の世界

（トロッコ）

目　次

芥川龍之介の世界

トロッコ

一、　冒頭の文章
二、　良平と二人の子供
三、　若い二人の土工（どこう）
四、　海の見える所
五、　藁（わら）屋根の茶店
六、　二件目の茶店
七、　衝撃の一言
八、　良平の逆走
九、　彼の家（うちゃ）へ
十、　その後の良平

※　参考文献

トロッコ

トロッコ

例えば、芥川龍之介の数多くの作品の中には、短編で有名な『トロッコ』という作品もあるかと思うが、その作品の「冒頭の文章」は、次のようなものである。

一、冒頭の文章

小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。工事を――といったところが、唯トロッコで土を運搬する――それが面白さに見に行ったのである。トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでいる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走って来る。煽るように車台が動いたり、土工の袢天の裾がひらついたり、細い線路がしなったり――良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一しょに、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処に止まってしまう。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのであった。

（本文）

＊　＊

まず、主人公の「良平」という子供は、年齢は、八つであり、小学二、三年ぐらいかと思うが、毎日、村外れへ、小田原熱海間の軽便鉄道敷設の工事を、工事と言っても、唯トロッコで土を運搬するのが面白くて見に行っていたのである。そして、そのトロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇み、そのトロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走って来る。そして、そのトロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処に止まると同時に、土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りて、その線路の終点に車の土をぶちまけ、それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始めるのである。

さて、主人公の「良平」という子供は、毎日、工事を見学しているうちに、ただ単に見てるだけではなく、やがて、トロッコに颯爽と乗ったり押したりしている土工の姿を見ているうちに、子供心にも、土工になりたいと思ったり、また、せめて一度でも土工と一緒にトロッコに乗ってみたいと思ったり、あるいは、たとえ乗れなくても、せめて押す事さえ出来たらと思うようになっていたのである。――つまり、毎日、工事を見学しているうちに、ただ単に見てるだけでは物足りなくなり、今度は、そのトロッコに「……乗ってみたい、押してみたい」というような思いが自然と生じて来たということである。これは、極めて自然な「思いや感情」であり、一般に、子供の心というのは、他人が乗ったりやったりしているのを見ているうちに、やがて自分も乗ったりやったりしてみたくなるものである。それは、例えば、遊園地などの乗り物などをはじめとして、子供の頃は、三輪車や一輪車あるいは自転車、その他、何であれ、他人が乗ったりやったりしているのを見ているうちに、やがて自分も乗ったりやったりしてみたくなるものであり、もちろん、それがわれわれ人間の「好奇心」というものであるとともに、われわれ人間をある方向へと向わせているまさに「原動力」にもなっているものである。そして、主人公の「良平」とい

う子供も、「……たとえ乗れなくても、せめて押す事さえ出来たらと思うようになっていた」のである。そして、主人公の「良平」という子供には、そのような思いがあったからこそ、次のような展開にもなっていくのである。

二、良平と二人の子供

或夕方、――それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外は何処を見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、――トロッコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行った。

その内にかれこれ十間程（一間は一、八メートルで約十八メートル程）来ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押しても動かなくなった。どうかすれば車と一しょに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好いと思ったから、年下の二人に合図をした。「さあ、乗ろう！」と。彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗った。トロッコは最初徐ろに、それから見る見る勢いよく、一息に線路を下り出した。その途端につき当りの風景は、忽ち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動揺、――良平は殆ど有頂天になった。しかしトロッコは二三分の後、もうもとの終点に止まっていた。（本文）

＊　＊

さて、主人公の「良平」という子供は、「或夕方」にやって来る。これは極めて大事なところであり、「昼間」ではだめなのである。それでは、なぜ「昼間」だといったい何がどうだめなのかと問えば、それは、「昼間」では多くの人たちが働いていて、トロッコに近づくことすらできないからである。そこで「夕方」（五時前後）ともなれば、恐らく、多くの土工たちも仕事を終えて家に帰ることになるだろう。そこの「チャンス」を狙って、わざわざ「夕方」に、しかも、一人ではなく、二つ年下の弟と同じ年の隣りの子供三人でやって来ているのである。それには、はっきりとした「意図」（企て）があるからであり、それは、たとえ一人では「トロッコ」を動かすことはできなくても、恐らく、三人ならば何とか動かせるのではないかというはっきりとした「思惑」があるのである。そのための「三人」（八歳の自分と六歳の弟と同じ年の隣りの子供）ということである。

さて、夕方、泥だらけのトロッコが薄明るい中に並んでいるだけで、その外には何処を見ても、土工たちの姿は見えなかったとある。そこで、三人の子供たちは、恐る恐る、一番端にあるトロッコを押してみるのである。すると、三人の力が揃うと、突然ごろりと車輪はまわり、良平はその音にひやりとしたとある。これは、その音で土工か誰かに気づかれるかと恐れたのと、もう一つは、もしかしたら動かないかも知れないという不安のなかで突然動いたので、ハッとしたのであり、二度目からはもう驚くことはなく、それは、動き出せば、ごろり、ごろりと、三人の手に押されながら、線路を登って行くからである。そして、十間程（約十八メートル程）来たところで、線路の勾配が急になり出し、いくら押して

も動かなくなった。そこで、主人公の「良平」は、年下の二人に「さあ、乗ろう！」と合図をして、彼等は一度に手を離し、トロッコの上へ飛び乗るのである。すると、最初は徐ろに、それから見る見る勢いよく、一息に線路を下り出し、顔に当る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動揺、主人公の「良平」は、ほとんど有頂天になっていた。それは、まさに彼の「思ったり考えていた通り」の結果になったからであろう。つまり、ここまでは、まだ八歳の子供であった主人公「良平」の「思惑通り」になったということである。しかし、トロッコは、二、三分でもとの終点に止まってしまい、そこで、「さあ、もう一度押すじゃあ」と、元気よく年下の二人に声をかけて、また、トロッコを押し上げにかかったのである。

＊　　＊

さて、ここまでは「子供たちだけの世界」であり、子供たちだけで楽しく遊んでいるという情景である。これは、例えば、公園や学校などの「すべり台」などでも、子供たちが一歩一歩階段を登っては、そのすべり台の上から一気にすべり下りるというようなことを、何度も繰り返しながら子供たちが楽しく遊んでいるというような情景に似たところがあるかと思う。それは、まず、子供たちの「体力でできる範囲」で遊んでいるということであり、それゆえ、精神的にも肉体的にも余裕を持って遊んでいるために、これという「不安や恐怖」などをそれほど感じることもないからこそ、心から楽しめているということにもなるのである。つまり、精神的にも肉体的にも子供たちの「許容範囲内」で遊んでいる限りは、登るのも楽しい、すべるのも楽しいと、心から楽しめている状態であり、あれこれ「不安や恐怖」などを感じることも少ないということである。ただ、あまりにも簡単にできてしまうと今度はつまらないということで、もっと難しいことに挑戦したくなるのも「人間の特徴」であるとともに、子供たちの精神的・肉体的「許容範囲」というものも、年齢とともにどんどん変化し拡大していくものである。

一方、例えば、小さな子供たちの精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えた「ジェットコースター」などであれば、その小さな子供たちは怖くて怖くてとても乗れないということにもなるのだろう。――つまり、何であれ、自分の精神的・肉体的「許容範囲内」であれば、それほど「不安や恐怖」などを感じることなく楽しめるかと思うが、自分の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまえば、今度は「不安と恐怖」などに強く襲われることにもなるのだろう。それゆえ、いちばんよいのは、自分の精神的・肉体的「許容範囲」の極めて近いところか、それを少し超えるような「挑戦や冒険心」などもくすぐられるようなものこそ、まさにわくわくドキドキするものであり、今、土工の姿の見えない夕方、三人の子供たちは、彼らの「許容範囲」に極めて近いところでトロッコを押したり乗ったりして楽しく遊んでいる真っ只中にあるということである。

＊　　＊

ところが、「さあ、もう一度押すじゃあ」と、良平は年下の二人と一緒に、又トロッコを押し上げにかかったが、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変った。

「この野郎！　誰に断ってトロに触った？」と、其処には古い印袢天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工が佇んでいた。――そう云う姿が目にはいった時、良

平は年下の二人と一緒に、もう五六間逃げ出していた。――それぎり良平は使いの帰りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思った事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はっきりとした記憶を残している。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、――しかしその記憶さえも、年毎に色彩は薄れるらしい。（本文）

＊　　＊

さて、主人公の「良平」と二人の子供たちは、まさに「有頂天になっていた」その時に、突然、彼等の後には誰かの足音が聞え出し、聞え出したと思うと、「この野郎！　誰に断ってトロに触った？」と、古い印袢天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工の恐ろしい「怒鳴り声」が聞こえて来たということである。これは、まさに背後からいきなり「冷水」を浴びせかけられたように、三人の子供たちは、恐らく、腰が抜けるほど驚いたとともに、ものすごい恐怖心に襲われたに違いなく、三人の子供たちは、もう五六間も逃げ出していたとある。そして、この「事件」以降、主人公の「良平」という子供は、何かの「使い」の帰りに、たとえ「……人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思った事はない」という「心理状態」に変わってしまう。それは、トロッコに乗りたいという気持ちは、潜在的には持ち続けていながらも、それよりも、あの古い印袢天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、あの背の高い土工の、あの恐ろしい「怒鳴り声」の方が勝ってしまい、とてもその気にはなれなかったということである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、いわば「トラウマ」に近いものであり、一度でも、心の底から怖いとか恐ろしいとか或いはいやだというような経験をすると、そのことがいつまでもその人の「頭の中」（或いは「心の中」）に潜在的に残ってしまい、そのために、そのことをすることが出来にくくなってしまうということである。

例えば、海で溺れそうになった経験を持つ人は、そのために、海で泳ぐことが怖くなったり、また、何かを食べて食中毒になった人は、そのために、その食べ物を食べることができなくなったり、或いは、大火や大地震あるいは大津波、その他、何であれ、一度でも、心の底から怖いというようなことを経験すると、そのことがその人の「頭の中」（或いは「心の中」）に潜在的に残ってしまい、そのために、そのことに対しては異常なほど「不安や恐怖心」などを抱くようになってしまうのである。そして、まだ八歳であった主人公の「良平」という子供の「頭の中」（或いは「心の中」）に潜在的に残ってしまったものは、まさに「……あの時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はっきりとした記憶を残している。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、――しかし、その記憶さえも、年毎に色彩は薄れるらしい」とある。つまり、主人公の「良平」という子供の場合には、どちらかと言えば、むしろ一過性のものに近く、それゆえ、深刻な「トラウマ」になるほどではなかったということである。だからこそ、次のような展開へと向かっていくことにもなるのである。

三、若い二人の土工

それは、その後十日余りたってから、良平は又たった一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだ

トロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いような気がした。「この人たちならば叱られない」――彼はそう思いながら、トロッコの側へ駈けて行った。「おじさん。押してやろうか？」と云うと、その中の一人、――縞のシャツを着ている男は、俯向きにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。「おお、押してくよう」と。……良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。「われは中中力があるな」と、他の一人、――耳に巻煙草を挟んだ男も、こう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好い」――良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙黙と車を押し続けていた。良平はとうとうこらえ切れずに、怯ず怯ずこんな事を尋ねて見た。「……何時までも押していて好い？」と聞くと、「好いとも」と、二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。そして、五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。「……登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから」――良平はそんな事を考えながら、全身でトロッコを押すようにした。（本文）

＊　＊

まず、ここまでの「本文」を見てみると、主人公の「良平」という子供は、あの「事件」から十日余り経ってから、今度は、「……良平は又たった一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた」とある。これは、あの「事件」があった時とは全く違って、まず、子供三人ではなく、主人公たった「一人」であること。しかも、「夕方」ではなく、まさに「……午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた」とある。これは、事件があった時とは、その「目的」がはっきりと違っているということである。つまり、一人だけで見学に来たということは、自分一人だけでトロッコに乗ろうという気持ちは全くないのである。しかも、「……午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた」ということは、すなわち、「トロッコ」を押す手伝いができるような「トロッコ」はないかと、ずっと捜していたということである。

すると、「……土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いような気がした」。そして、「この人たちならば叱られない」と、彼はそう思ったとある。つまり、主人公の「良平」という子供は、何よりも「叱られる」ことを恐れていたのであり、それゆえ、叱られずに、「トロッコ」を押す手伝いができるような「トロッコ」はないかと、ずっと捜していたということである。「……すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た」ということである。

＊　＊

さて、この場面で最も大事な言葉は、「……枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た」という言葉であり、なぜ、これが最も大事な言葉になるのかと言えば、それは、まさに「本線」であるので、当然のことながら、いちばん「長く続く路線」になっているということである。それが結果として、主人公の「良平」という子供を、遙か遠くまで連れて行ってしまう直接の要因の一つになっているのである。

むろん、主人公の「良平」は、この段階では、又、彼の年齢（八歳）では、そんなことは知るよしもなく、主人公の「良平」は、トロッコの側へ駈けて行き、「おじさん。押してやろうか？」と言うと、その中の一人、――縞のシャツを着ている男は、「おお、押してくれ」と、思った通り快い返事をしてくれ、良平は二人の間に入り、力一杯押し始めると、「われは中中力があるな」と、他の一人、――耳に巻煙草を挟んだ男も、こう良平を褒めてくれたとある。これは、まさに主人公の「思惑通り」になったということであり、そして、「……登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから」と思うのも、主人公の「良平」という子供は、このまま「ずっと少しでも長くトロッコを何時までも押し続けていたい」と、そう心から願ったということであり、まさかトロッコに乗せてもらえるなどとは、この時点ではまだ考えてはいなかったからであり、それゆえ、できるだけ長くトロッコを押し続けていたいという思いで一杯になっていたのである。

＊　＊

そして、蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直に飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた辷りに線路を走り出した。「……押すよりも乗る方がずっと好い」――良平は羽織に風を孕ませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」――そうもまた考えたりした。（本文）

＊　＊

さて、ここまでは、主人公の「良平」という子供の精神的・肉体的「許容範囲内」で遊んでいるために、押すのも楽しい、乗るのも楽しいと、心の底から楽しんでいる状態であり、それゆえ、これという「不安や恐怖」などを感じることもほとんどなかったということである。だからこそ、「……行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」などと、できるだけ長くまた楽しく遊んでいたいという「考え方」になっているのである。ところが、次の段階からは、そのような、まさに「……押すのも楽しい、乗るのも楽しいと、心の底から楽しんでいる状態」から、やがて、一抹の「不安や恐怖」などが生じて来るようになるが、それは、次のような場面からである。

四、海の見える所

それは、竹藪のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止めた。三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先上りの所所には、赤の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやっと登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはっきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「……もう帰ってくれれば好い」――彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、勿論彼にもわかり切っていた。（本文）

＊　＊

さて、主人公の「良平」という子供は、軽便鉄道敷設の工事を何度も見学しているう

ちに、ただ単に見てるだけではなく、やがて、トロッコに颯爽と乗ったり押したりしている土工の姿を見ているうちに、子供心にも、土工になりたいと思ったり、また、せめて一度でも土工と一緒にトロッコに乗ってみたいと思ったり、あるいは、たとえ乗れなくても、せめて押す事さえ出来たらと思うようになっていたのである。そして、今やその「夢」は叶って現実となり、まさに土工と一緒にトロッコを押したり乗ったりして心から楽しんでいる「心的状態」にあるということである。

それは、最初、三人でトロッコを押し続けては、蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになったので、一人が良平に「やい、乗れ」と云って、三人は、トロッコに同時に乗って、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた辷りに線路を走り出し、竹藪のある所へと来ると、今度は、トロッコは静かに走るのを止めたので、三人はまた前のように重いトロッコを押し始め、そして、その竹藪は何時しか雑木林になったとある。ここまでは、蜜柑畑をはじめ、竹藪や雑木林などの生い茂っているところを通っていたので、自分が今どの辺にいるのかもよく分からない状況であったが、やがて、その雑木林の落ち葉の積もる線路をやっと登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広広と薄ら寒い海が開け、それと同時に、良平の頭には、余りに遠く来過ぎたことが、急にはっきりと感じられたとある。

これは、視界が大きく開けたので、初めて自分が今どの辺にいるのかがはっきりと認識できたとともに、自分が余りに遠く来過ぎたことが急にはっきりと感じられたということである。この時、初めて、主人公「良平」の「頭の中」（或いは「心の中」）では、はっきりと「不安の思い」が生じて来たということである。それは、主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」を少しでも超えてしまったという認識であり、しかも、三人はまたトロッコへ乗って、車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行ったとある。これでは、家からますます遠く離れていくばかりであり、主人公の「良平」の「頭の中」（或いは「心の中」）では、もうとても今までのように「面白い気持ち」になることはできず、それどころか、むしろ「……もう帰ってくれれば好い」のにと念じるほどになっていたのである。これは、誰にもその人なりの精神的・肉体的「許容範囲」というものがあり、その精神的・肉体的「許容範囲」を超える割合が大きくなればなるほど、それだけ「不安や恐怖心」などもますます増していくことになる。――そして、まだ八歳であった主人公「良平」の場合も、その精神的・肉体的「許容範囲」を超える割合が大きくなればなるほど、それだけ「不安や恐怖心」などもますます増していくことになり、しかも、トロッコは、行く所まで行き着かなければ、トロッコも彼等も帰れないことは、勿論彼にもわかり切っていたのであり、だからこそ、余計に「不安や恐怖心」などを増していたのである。

ただ、この時に、若しも「家に帰りたい」と泣き叫んでいたら、あるいは、この時点で家に帰れたかも知れない。しかし、一方では、自ら望んでトロッコを押したり乗ったりしていたのだから、もう「家に帰りたい」と泣き叫ぶような行為は、いくら子供でも子供なりの自尊心（プライド）があったのかも知れない。あるいは、ただ（大人に対して）言い出せずにいただけなのか、それとも、大人の方から言い出してくれることを待っていたのか、この辺のところは、なんとも判別しがいところである。

五、藁屋根の茶店

さて、その次に車の止まったのは、切崩した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児をおぶった上さんを相手に、悠悠と茶などを飲み始めた。良平は独りいらいらしながら、トロッコのまわりをまわって見た。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ねかえった泥が乾いていた。

少時の後茶店を出て来しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、（その時はもう挟んでいなかったが）、トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「難有う」と云った。が、直に冷淡にしては、相手にすまないと思い直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあったらしい、石油の匂いがしみついていた。（本文）

＊　＊

さて、この場面は、まだ若い二人の大人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」と、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」との「決定的な違い」であり、まず、まだ若い二人の大人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」というのは、休日を除けば、毎日、朝から夕方まで、トロッコを押したり、乗ったりすることは、まさに「日常の作業」であり、それゆえ、たとえそれが過酷な「肉体労働」であったとしても、まだ若い二人の大人の土工の精神的・肉体的「許容範囲内」で十分に行なわれているものであり、それゆえ、トロッコを押したり、乗ったりすることは、余裕を持ってできているのであり、従って、これという「不安や恐怖心」などはそれほど感じないで済んでいるのである。もちろん、若い二人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまえば、それは、さすがに「過酷過ぎる」ということで、きつくはなるだろうが、ここでは、そのような「労働設定」にはなっていないのである。

そして、次に車の止まった場所は、背後に切崩した山のある、藁屋根の茶店の前であり、若い二人の土工は、（恐らく、いつものことのように）、その茶店へ入ると、乳呑児をおぶった上さんを相手に、悠悠とお茶などを飲み始めたとある。これは、そのまま若い二人の精神的・肉体的「余裕を表している」ものであり、一方、まだ八歳の主人公「良平」はと言えば、独りいらいらしながら、トロッコのまわりをまわって見ている。これは、逆に、主人公「良平」の精神的・肉体的「余裕のなさの表れ」であり、少時の後、茶店から出てきた、巻煙草を耳に挟んだ男、（その時はもう挟んでいなかったが）、その人から新聞紙に包んだ駄菓子をもらっても、心に余裕がないために少しも嬉しくなく、だからこそ、良平は冷淡に「難有う」と言うのであるが、しかし、わざわざ買ってくれた善意の行為に対して、直に冷淡に対応するのは相手にすまないと思い直して、主人公の「良平」は、その冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れたとなるのである。

これは、一つの「対応」（パフォーマンス）であり、例えば、誰かから何らかの「手土産」などをもらった時には、後で、（ひまの時にも）、開けて見ますではなく、できるなら、その場で開けて、物であれば、素敵な「お土産ありがとう」とお礼を言い、また、食べ物などであれば、実際に食べてみて、これは「実に美味しい」とお礼を言うのが、ふつう一般的な「対応」（パフォーマンス）の一つになっているということである。

ところで、若い二人の土工は、なぜ、どうして、まだ八歳の主人公「良平」という子供を「トロッコ」に乗せるようなことをしたのだろうか？　本来であれば、極めて危険な「工事現場」に八歳の子供などを入れるなどは、絶対にあってはならない「禁止事項」に

なっていたはずであり、それが、まさに最初に大きな声で怒鳴る土工の行為であったと思うが、それは、次のようなことではなかったかと思う。――まず、最初に考えられることは、誰かに押してもらえれば、それだけ楽になることは当然のことであるが、しかし、まだ八歳に過ぎない子供の「力」などはたかが知れたものであり、かえって作業の邪魔になるばかりである。だとすれば、それ以外の、何かほかの理由も考えて見なければならない。それは、次のようなことではなかったかと思う。

まず、まだ八歳の主人公の「良平」という子供は、毎日のように、その工事を見に来ていたとある。だとすれば、当然のことながら、若い二人の土工たちをはじめ、そこで働く多くの人たちも、恐らく、主人公の存在は知っていたかも知れない、そして、今日もあの子が来ているよと、噂になるようなこともあったかも知れない。それでは、なぜ、毎日、見に来るのだろうかと考えた時に、それは、やはり子供心にも「トロッコ」に一度でも乗ってみたいのではないかと、すぐにも思いつくことではないかと思う。そして、若い二人の土工たちも、自分が子供の頃には、やっぱりトロッコに乗ってみたいと思っていたものだと話すようなことがあっても、なにも不思議なことはないだろう。つまり、子供の頃には、多くの子供たちが、一度はトロッコに乗ってみたいような気持ちに襲われるものであり、それゆえ、八歳の主人公「良平」という子供に「トロッコ」を押してもらったので、いわばそのお礼のつもりでトロッコに乗せてやろうと思ったのかも知れない。それは、主人公の「良平」に新聞紙に包んだ駄菓子などをくれたのと同じような心理ではないかと思う。それに加えて、良平の「……何時までも押していて好い？」というような言葉も聞いていたので、恐らく、この子は、トロッコに乗ってみたいんだろうなあと推測したということである。……

六、二件目の茶店

さて、茶店を出て、再び、三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていた。そして、その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があった。土工たちがその中へはいった後、良平はトロッコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」――彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかった。トロッコの車輪を蹴って見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、――そんな事に気もちを紛らせていた。（本文）

＊　＊

さて、この場面は、再び、三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていたとある。この時の主人公「良平」の「心の状態」というのは、当然のことながら、自分は早く家に帰りたいと思っていながらも、実際にやっていることは、それとは全く真逆の、自分の家からますます遠く離れていくようなことの手伝いを自ら行なっているという、この何とも言えない矛盾を感じながらどうしたらよいのかと考えていたということである。そして、その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があり、土工たちは、（当然のことのように）、その中へと入っていった。これは、若い二人の土工たちにとっては、実にごく当たり前の極めて「日常の行

動パターン」に過ぎないのに対して、一方の、まだ八歳の主人公「良平」にとっては、今までの人生の中で未だ一度も経験したこともないような実に驚くべき「非日常的な場面に直面している」のであり、それゆえ、どうしよう、どうしようと、帰る事ばかり気にしていたのである。しかも、茶店の前に咲く梅の花への西日の光が消えかかっている。ああ、「もう日が暮れる」――そう考えると、主人公の「良平」は、もうぼんやり腰などかけてもいられず、トロッコの車輪を蹴って見たり、一人では動かないのを承知でうんうんそれを押して見たり、――そんなことで気持ちを紛らせていたのである。

六、衝撃の一言

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にこう云った。「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するずら」と。良平は一瞬間呆気にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならない事、――そう云う事が一時にわかったのである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思った。泣いている場合ではないとも思った。彼は若い二人の土工に、取って附けたような御時宜をすると、どんどん線路伝いに走り出したとある。（本文）

＊　＊

さて、この場面こそは、まさに最大の「クライマックス場面」の一つであり、それは、次のようなことである。つまり、まだ八歳に過ぎない主人公の「良平」という子供の「頭の中」（或いは「心の中」）では、実に色々な「思いや考え」などがあれこれ現われたり消えたりしているなかで、どうしよう、どうしようと、帰る事ばかり気にしていたが、その「どうしよう、どうしよう」という最大の「難問」が、一瞬にして、急転直下、次の言葉で問答無用で「最終決着」してしまったということである。それは、「……われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「……あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するずら」と、無造作に言い放たれて、良平は一瞬間呆気にとられたとある。この「呆気にとられた」というのは、一つは、もう少し大人らしい「思いやり」のある優しい決着方法もあるのではないかという思いと、もう一つは、まだ八歳に過ぎない主人公の「良平」にとっては、まさに「一人だけ突然無造作に放り出されたような、或いは、いきなり突然見捨てられたような孤独感」に強く襲われたということである。

そして、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供の「頭の中」（或いは「心の中」）では、次のような「想い」が一瞬のうちに駆けめぐったということである。それは、もうすぐ暗くなるということ、去年の暮れに母親と一緒に岩村に来たが、今日の道のりは、それよりも三倍も四倍もあるということ、そして、もう一つは、これからたった一人で、歩いて帰らなければならないということが、一時にわかったということである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思った。泣いている場合ではないとも思った。これは、実に素晴らしい認識であり、なぜなら、現状を冷静に判断する能力と感情に流されない強い精神を持っているからである。そして、主人公の「良平」は、若い二人の土工に、取って附けたような御時宜をすると、これは、若い二人の土工への依存心（助

けて貰いたい）気持ちを断ち切って、どんどん線路伝いに走り出したということである。

＊　＊

ところで、この若い二人の土工の、「……われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「……あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するずら」という言葉は、まだ八歳に過ぎない子供に対して、もうすぐ暗くなるというのに、かなりの距離を、しかも、これからたった一人で、暗い夜道を帰らせようとするのは、少し酷な言葉ではないかと思われるかと思うが、しかし、それは、次のようなことなのである。――つまり、若い二人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」と、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」との「決定的な違い」から生じて来る問題であり、それは、若い二人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」から見れば、もうすぐ暗くなることやここまでの距離感あるいはその暗い夜道を一人で帰えるというようなことは、若い二人の土工にとっては、ほとんど何でもないように感じられるようなものであるのに対して、一方の、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供にとっては、もうすぐ暗くなるということ、また、かなりの距離をたった一人で暗い夜道を帰らなければならないということは、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」から言えば、それは、もう死ぬほどつらく怖いことになるという、そういう精神的・肉体的「許容範囲」の「決定的な違い」から生じて来る問題になるということである。

例えば、暗い夜道を一人で帰えるというようなことは、大人の人たちにとっては、それほどもうどうということはなくても、まだ八歳に過ぎない子供たちにとっては、それは、まさに死ぬほど怖いということになるのである。また、距離感にしても、大人の人たちが持っている「距離感」と、まだ八歳に過ぎない子供たちが持っている「距離感」とでは、全く全然違うものであり、大人の人たちにとっては、たとえ何でもないような距離でも、まだ八歳に過ぎない子供たちにとっては、それは、死ぬほど長い距離に感じられるというようなことは、いくらでもあるのである。それは、すべてのことについて言えることであり、つまり、それは、何であれ、その人の精神的・肉体的「許容範囲内」であれば、それほど「不安や恐怖」などを感じることなく楽しめるかと思うが、一方、その人の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまえば、今度は「不安と恐怖感」などに強く襲われることにもなってしまうのである。それゆえ、いちばんよいのは、自分の精神的・肉体的「許容範囲」の極めて近いところか、それを少し超えるような「挑戦や冒険心」などもくすぐられるようなところこそ、まさにわくわくドキドキするところであり、それゆえ、その人にとっては最も「楽しめる領域」になるのである。

八、良平の逆走

さて、良平は少時無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懐の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側へ抛り出す次手に、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙かに軽くなった。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駈け登った。時時涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪んで来る。――それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかっていた。良平は、愈

気が気でなかった。往きと返りと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡れ通ったのが気になったから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てた。……

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば――」、良平はそう思いながら、辷ってもつまずいても走って行った。やっと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなった。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。――彼の村へはいって見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはっきりわかった。井戸端に水を汲んでいる女衆や、畑から帰って来る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。（本文）

＊　＊

さて、まだ八歳の主人公「良平」は、しばらく無我夢中で線路の側を走り続けたとある。そして、その内に懐の菓子包みが、（走るのに）邪魔になることに気がついたから、それを路側へ抛り出す次手に、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙かに軽くなったとある。――これは、家に帰ることを何よりも最優先させて、それを妨げるもの、あるいは邪魔になるものは、すべて排除したということである。そして、今まで来た線路の側を逆走するような形で、主人公の「良平」は、左に海を感じながら、急な坂路を駈け登った。時々涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪んで来る。――それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴ったとある。この時々涙がこみ上げて来るのは、むろん、幾つかの理由があるかと思うが、この場合は、やはり「不安や恐怖感」などから自然と涙が出てきて、その涙は鼻の方へと流れ込んでは、鼻だけは絶えずくうくう鳴っていたということになるのだろう。

そして、竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかっていた。良平は、愈気が気でなかった。往きと返りと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡れ通ったのが気になったから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てたとある。――まず、このトロッコ路線の全行程であるが、それは、最初、「……村外れの工事場→蜜柑畑→竹藪→雑木林→海が見える所→藁屋根の茶店→二件目の茶店」までであり、その茶店から、今度は、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供は、ほとんど無我夢中で線路の側を走り続けるのである。それは、まさに逆走であり、「……二件目の茶店→藁屋根の茶店→海が見える所→雑木林→竹藪→蜜柑畑→村外れの工事場→彼の村→彼の家」へと帰って来るのである。

それは、本文では、蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば――」、良平はそう思いながら、辷ってもつまずいても走って行った。やっと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなった。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。――彼の村へはいって見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはっきりわかった。井戸端に水を汲んでいる女衆や、畑から帰って来る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

＊　　＊

例えば、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなった。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けたとある。これは、一体、どのようなことかと敢えて問えば、それは、恐らく、一思いに泣いてしまうと、そこまでずっと張り詰めていた「思いや緊張感」などが一気に解放されてしまうとともに、全身の力も萎えてしまうものだからである。それでは、かえって、走ることが出来なくなったり、或いは、走ることに支障をきたすことにもなってしまうからだろう。そして、「命さえ助かれば――」、良平はそう思いながら、辷ってもつまずいても走って行ったとある。これは、つまり、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供にとっては、死ぬか生きるか、ほとんど「命がけの逆走劇」であったということである。それは、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまったということである。だからこそ、次のような現象が起こることにもなるのである。

九、彼の家へ

それは、彼の家の門口へ駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかった。その泣き声は彼の周囲へ、一時に父や母を集まらせた。殊に母は何とか云いながら、良平の体を抱えるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜り上げ啜り上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集って来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、（本文）

＊　　＊

さて、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供は、彼の家の門口へ駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかったとある。これは、一体、どのような「心的状態」かと敢えて問えば、それは、何か恐ろしいほどの「不安や緊張感」その他などから真に解放されたような時には、われわれ人間というのは、まさにその「安堵感」から、一気にわっと泣き出さずにはいられないほどの強い情動に襲われるとともに、その強い情動の「涙」というのは、自分でも止めようにも止められないほどのものになっていくのである。ましてや、まだ八歳に過ぎない子供であれば、なおさらのことである。そして、父母は勿論その他の人たちも、口口に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかったとある。それは、他人に説明でき得るような単純な種類の情動などではなく、それは、もっと人間の「根源的な情動」であり、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまったところの、その何とも言いようのない「不安や恐怖感」その他からの解放から生じて来るところの「情動」であり、それは、あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、「……いくら大声に泣き続けても、足りない気持ちに迫られながら……」ということになるのである。

十、その後の良平

さて、最後の「本文」であるが、それは、「……良平は二十六の年、妻子と一しょに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？――塵労に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。（本文・完）

＊　　＊

まず、主人公の「良平」は、二十六歳の時、妻子と一緒に東京へ出て来たとある。だとすれば、二十五歳までは、彼の村にいて、高校卒か、大学卒かは分からないが、そこで就職をし、結婚をして、子供もいたということである。そして、二十六歳の時、妻子と一緒に東京へ出て来ては、今は、或る雑誌社の二階で、校正の朱筆を握っているとある。つまり、彼の子供の頃の一つの夢であった颯爽とトロッコに乗ったり押したりする「土工」になりたいというような想いは、恐らく、あの「事件」（逆走）以来、それがいわば「トラウマ」のようになっていて、今では、或る雑誌社の二階で、校正の朱筆を握るような職業に就いているということである。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？　それは、一体、どのようなことかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。

つまり、まだ八歳に過ぎなかった主人公「良平」という子供は、ほとんど無我夢中で線路の側を走り続けたのである。それは、まさに逆走であり、「……二件目の茶店→藁屋根の茶店→海が見える所→雑木林→竹藪→蜜柑畑→村外れの工事場→彼の村→彼の家」へと、「命さえ助かれば――」と、そう思いながら、辷ってもつまずいても走り続けたのである。それは、つまり、まだ八歳に過ぎなかった主人公「良平」という子供にとっては、まさに死ぬか生きるか、ほとんど「命がけの逆走劇」であったとともに、まだ八歳に過ぎなかった主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまった出来事であったがために、その後、何かの折にふと思い出されることがあり、それは、いわば一種の「トラウマ」になっているのであり、ふだん、あれこれのことがうまく行っているような時には、彼の「無意識の世界」に深く眠っているような状態であるが、しかし、何か「不安や恐怖感或いは困難」などに襲われたような時には、また、そうではないような時にも、ふとあの時のことが思い出されることがあるということである。……

そして、塵労に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。――これは、塵労（例えば「仕事や生活その他」）などに疲れた彼の前には、今でもやはりあの時のような「薄暗い藪や坂のある路」（それは「不安や恐怖感或いは困難」などの象徴）が、細細と一すじ断続（時々途切れながら続いている）ということである。――この最後の「断続」という言葉は、全く途切れることなく続いているのではなく、時々途切れながら続いているということであり、それゆえ、あれこれのことがうまく行っているような時には、薄暗い藪や坂のある路（それは「不安や恐怖感或いは困難」などの象徴）は、彼の「無意識の世界」に深く眠っているような状態であるが、しかし、何か「塵労」（例えば「仕事や生活その他」）などに疲れたような時には、今でもあの時のような「薄暗い藪や坂のある路」（それは「不安や恐怖感或いは困難」などの象徴）がふと思い出されることがあると共に、これから先も（時々途切れながらも）

そのようなことが続いて行くことになるのだろうということである。（完）

＊　＊

「参考文献」

※底本「トロッコ　芥川龍之介」（「青空文庫」）